
es 『I'm just me!』 ~ Redbloom in Darkness編

祯 左右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Personas Ifes 『I'm just me!』
Redbloom in Darkness 編

【Nコード】

N1867T

【作者名】

祢 左右

【あらすじ】

「心とは『絆』によって満ちるもの。貴女様の力は絆によって培われた『心の力』なのです」

「わかった、じゃ、ハーレムを作ればいいんだねっ！」

隠された時間に現れる怪物、シャドウ。そいつらを唯一倒せる力、ペルソナ。

今、力に目覚めたのはどこまでも破天荒で、実に残念な美少女、

一之瀬沙耶だった。

俺はそんな運命と物語、そして彼女に振り回され続ける。

どこまでも深く、混沌とした闇を纏わりつかせながら。

ペルソナ3の二次創作です。他の作品と平行して執筆しているため、更新速度には期待せぬよう願います。

物語へと歩む前に くプロローグ（前書き）

今回はプロローグのみです。ペルソナ3はもう一つ、作品を執筆しておりますのでよろしかったらどうぞ。

物語へと歩む前に　～プロローグ

目の前にいる異形。

タキシードに身を包んだ、紳士然とした存在。

ワシのような鼻が長く突き出た顔、天狗のような容貌のソイツはイゴールと名乗る。

その男の血走った、飛び出るように大きい目が俺達を見る。

その大きな瞳に映りこむのは二人の少年。俺と、もう一人。

俺の隣に凜として佇む、ポニーテールの可憐な少女、一之瀬 沙耶。

彼女はその異形を見ても、わずかも驚き恐怖する様子を見せなかった。

「……一之瀬様は仮面^{ベルソナ}という力に目覚めたのでございます」

仮面^{ベルソナ}。

俺達人間が、隠された時間に存在する怪物、『シャドウ』を倒すことの出来る唯一の手段。

それが、仮面^{ベルソナ}。

この現実に見れた、非現実的な現実。

イゴールと名乗る異形は、一之瀬に向かって語り続ける。

「貴女方が持った『ベルソナ能力』とは『心』を御する力なのです」
「よ」

「……心を制御する？」

一之瀬がイゴールの声に呟きを返す。

鈴の音のように、心地よく響く声だった。

「さよう、心です。貴女方は……『心』を操り戦う。即ち、ペルソナ仮面とは心の力なのですよ」

そう、鍛えられた精神、覚悟と決意こそが力となる。……それが隠された時間『影時間』での戦い。

俺達、『ペルソナ使い』の根本とも言える部分だ。

って言うか、俺からするともう知っている話だらけつか、思いつきり新鮮味にかけろ話題だったので、そろそろ飽きていた。

「そして、心とは『絆』によって満ちるものです」

「『絆』……ですか？」

「さよう、他者と関わり、絆を育み、貴方だけの『コミュニティ』を築かれるが宜しい。『絆』こそが『ペルソナ能力』を伸ばしていくのです」

一之瀬はその可愛い顔で真剣に話を聞いているが、俺の中では、へえ……なんかありがちな、流れだなあ。さすが夢。……って、感じである。

夢なのかって？ そりゃ、現実に天狗なんかいないだろ。

つか、もういいだろ。俺はもう帰ってえよ。

夢からの帰り方？ ……俺は知らんよ、つか帰る気があるならどうにでもなるわ。

俺はさっさと話を終わらせたい気持ちでいっぱいだったために、さっさと結論付けてやろう。とした。

「要するにさ、天狗。強くなりたきゃ……」

「ハーレムを作ればいいんだねっ！」

「そう、ハーレム……は？」

俺は思わず、隣を見る。

赤みがかった瞳を輝かせ、一之瀬は叫んだ。

そう、ハーレムと。

「ハーレム、って、おい。待て。ちょ……」

「たくさんの人と強い『絆』を作ればいいんでしょ？」

その言葉に天狗こと、イゴールは頷く。

「……さよう、その通りでございます。心とは『絆』によって満ちるもの、貴女様の力は絆によって培われた『心の力』なのです」

「じゃ、ハーレムじゃん！ そしたら強くなれるじゃんっ！ わたし、一回で良いから作ってみたかったんだ」

え……一回ってなに？ そういうノリで作るモノなのかっ！？

俺は一応、一之瀬に突っ込みを入れておく。どこから突っ込むべきか、まったくわからないけど、とりあえず。

「いや、お前。ハーレムって言うけど、異性オンリーじゃなく、同性相手との絆もありうるわけだろ？」

「……？ まあそうだね」

「だから、ハーレムって言い方はなんか違うんじゃないかと」

「はー、なるほどね」

深く何度も頷く、一之瀬。

そして、顔を上げて一言。

「じゃあ、わたし、逆ハーレムの女王になるっ！」

「俺の言っている科白伝わってねえっ！？」

「女の子が作る場合は逆、って付くんでしょ？」

「俺の言いたかった部分ってそこじゃねえよっ!？」

俺の話が終わらせようとした意図は空中分解し、おもいつき空回りである。

この物語は基本的に、そんなことばかりだ。

いや、物語と言う言い方をするなら、俺の物語はもっと過去に始まったものだったろうし、一之瀬^{こいつ}、の物語もそうだろう。

「よし、そうと決まったらアレだね。イケメンにも可愛い女の子にも声掛けまくらないとね！」

「男女、マジで関係なしっ!？」

「なに言ってるの、美人はみんなわたしのものだよ。年齢問わずっ!」

「問えよ、そこはっ。せめて、それくらいはっ!」

でも、間違いなく。

この波乱万丈で論理破綻しかけた毎日、こいつが来てから加速したんだ。

それが幸せなことかはわからないけど、退屈なんて言葉は全部吹っ飛んだ。

計算とか、策略とか、取り繕うとか、そんなものが全部つまらないものに見えた。

「ふっふっふ。眼鏡キャラからロボキャラ、おじ様や人外まで全部揃えないとね」

「ロボなんて存在するかああああっ!」

もつとも、それでもなお俺にとってそういう嘘や作り物めいた物事ってのは、依然として欠かせない存在であり続けたけど。

いや、むしろ俺は一之瀬^{いちのせ}と出会ったせいでそんなものをより強く身にまとうことになった。それは俺が弱いから、『心に鎧を』付けなきゃ、こんな輝きの傍にいられないような人間だったからだ。

「いるよっ。世の中にはメイドさんも執事さんもいるし、夢の国も希望もあるよっ！」

「同じレベルで並べんなっ！ メイドと執事はれっきとした職業で、夢の国はちゃんと東京にあるわっ」

「……東京じゃないよ、千葉だよ？ 馬鹿なの？」

「いきなり冷たい目になった!？」

それがどんな結果を生むのか、この時の俺はなにも知らなかった。
考えるはずもなかったんだ。

そう、俺の物語はもう少し前までさかのぼる。

ほとんど、すべての元凶とも言つべき。そんな俺と一之瀬^{いちのせ}の物語。

物語へと歩む前に　　プロローグ（後書き）

原作そっちのけで進んでいく可能性があります、ご注意ください。

4月6日 月曜日 く 『物語のはじまり』（前書き）

ようやく更新です。

あまり序盤は変化がないのですが、ちょっとしたことが致命的な差へと変化していきます。徐々に……ではありませんが。

4月6日 月曜日 く『物語のはじまり』

物語のはじまり
おわり

時は、待たない。

すべてを等しく、終わりへと運んでゆく。

限りある未来の輝きを、守らんとする者よ。

一年間。

その与えられた時を往くがいい。

己が心の信ずるまま。

緩やかなる日々にも、揺るぎなく進むのだ。

これより、物語ははじまる。
おわり

常に世界は終焉へと向けて、走り続けている。

物語の登場人物は、その宿めから決して逃れられることはない。

「はっ、登場人物がいつまでも大人しくしてると思うなよ？」
おれたち

4月6日 月曜日

「すげー、あつたけえ……しかも、動きやすっ」

そんなことを呟きながら俺は軽く身体を動かす。

今、俺が身に纏っているのは、真っ黒なトレーニングウェアだっ

た。完全に黒なだけだと夜危ないんで、あちこちに小さな反射シートが貼り付けられている。

その着心地はまだ夜は風が冷たいこの季節でも、その抜群の保温性でがっちり護ってくれることを確信出来るものだ。

さらに、買ったばかりのランニングシューズは、はいた瞬間に軽さを感じてしまうような代物だった。シューズ分の重みが加わったはずなのに、軽いと思うとか何事って話だ。

しかも、走りやすい。確実に走る時の速度を上げてくれる気がする。今までこういう靴をはいたことがなかったので、感動も大きい。

そう、思わず……素で感動してしまった。
うん、不覚にも。

視線をゆつくりと動かす、その先には『してやったぜ』と言う、自慢げで達成感バリバリの表情で「フッ」とクールを気取って笑いやがる男がいた。

真っ赤なトレーニングウェアを纏う、スタイルよくがっちりとしたその男は、非常に腹立たしいことに、女の子ならついみとれてしまい立ち止まり。

……男なら、自分の顔を思い出してなにも言わずに俯いてしまうほどに、顔の整った顔だった。ちなみに俺は男なので悪意しか持てない。

さらに腹立たしいことに、残念ながらソイツは俺の先輩だった。

「なに見てるんですか、先輩」

「いや……気に入ったようだな、夜由良^{やゆら}」

「そう見えます?」

「ああ、見える」

とりあえず俺は睨みつけてみる。

しかし、平然と先輩はそれを受け流す。日頃から、殴られて顔の形が変形したような強持てに相手に殴りあいしているだけのことはあるな。

こいつも顔面変形してしまえばよかったのに。

「ふむ、で、なにか不都合はなかったか？」

俺の内心を知らずにさわやかに問う、先輩。

「ないですよ、サイズも合ってますね……ってなんで俺の体のサイズ知ってたんだっ！？」

「寮生のデータはすべてファイルにまとめられている」

「見んなよっ！」

思わず、先輩相手に素で突っ込む俺。

先輩はなにやら怪訝そうな顔をした、完全に理解不能と言った様子だ。

「なにが不満だ？」

「いや、もう。いいです。……でも、服のサイズなんかなんでわかるんです？ プロファイルに載っているわけ……ああ、大雑把なMとかしとかの規格が分かればいいんですけどもんね、身長が分かれば……」

「制服の注文は学園に出しているだろう？ 健康診断とかな」

「ええ、メジャーで計ってサイズを……って、おい！」

プライバシー皆無じゃん！

そこまで載ってんのかよ、セクハラで訴えんぞ、この野郎！

「おかげできっちり身体に合わせたものを用意できた。より良いトレーニングは、やり方だけでなく良い環境と良い道具を使うことで……」

そう、トレーニング談義を一人で始める先輩。

この人には俺の方からもトレーニングの指導を頼んだと言う経緯がある拳句、シューズやらウェアを全部用意して貰ったんであまりキツクは言えないんだが。

あんまり調子に乗んなよ、この野郎。

なにか？ 顔がよければなんでも許されるとでも思ってるのか？
先輩だからって調子に乗ったらぶっ飛ばすぞ？

「今回は俺のボクシングのトレーニングと平行して、今のお前に合わせたトレーニングを組むための確認を行う。体力測定だと思ってくれ」

「……はい」

……わかってるよ、無理なのは。俺にはこの人をぶっ飛ばせる気がしねえよ。

月光館学園高等部3年、真田 さなだ 明彦 あきひこ。

先輩はある理由とイケメンであると言うことで話題性の高い超有名人だ。そう、その理由とは高校ボクシングチャンピオンであると言うことだった。

もちろん、そんな称号は伊達じゃない。

先輩はランニングのときに思い出したようにシャドウボクシング

を始めるが、その時にもわかる。グローブをしている時とそうでない時の拳速の差はハンパじゃないってこと。

拳が見えないなんて、フィクションの話だと思っていたがそうじゃない。

……本当に見えないんだ。対面しているとなおさら……完全に拳が消える。

殴られる時の視点と、それを横から見ている視点で感じる速さの差は果てしなく大きい。

んで、腕っ節だけじゃなく顔はいい。その上、勉強も出来る。当然、女の子のファンはめっちゃいるわけだ、俺とはありえないほどの人生に差がある。

「さて、かなり時間があるからゆっくりやるか」

「……そうですね、まだ0時には果てしない時間がありますね」

「ああ、まずは軽く一時間ぐらい走るか。その後に簡単に反射神経や筋力を計らせてもらおう」

「……さいですか」

早くも後悔し始めた、俺。

真田先輩、勘違いしてませんか？ 俺、ボクシング部には入ってませんよ？

あくまで、入れられた特別課外活動部の範囲での指導だからね？ 訓練は『影時間』が最適とか言うから、付き合ってますよ？

まあ、確かに俺から言い出した部分もあるけどさ……命がかかっているし。それに、この活動への協力から生活費が出てる以上、手を

抜くわけにも行かないしな。

トレーニングは自分のためにこそ、必要って訳だ。

俺は大人しく、真田先輩の指示通りに走りだす。

……そもそもこんな奇妙なことになっちまったのは、俺の夢遊病みたいなのが原因だろう。その辺の事情は追々、わかるだろうからやめとく。

まずは自己紹介だな、俺は夜由良 優^{ゆう}。月光館学園の高等部、二年生だ。

もともとの所属は、誇り高き帰宅部、次期部長を狙う帰宅部のエース……は辞めさせられ、今じゃ諸事情で生徒会なんぞに入られ、その上得体の知れない特別課外活動部なんかに入ってしまったている。恥ずかしいわ、俺は真面目かってのっ！

えっ、ちょっと待ってくれよ。特別課外活動ってなんだ？

……ボランティア部ってことか？

そう思った人いる？ 正解です、それであってるよ、無料で人々を助けるボランティアだ。ただし、人を喰らう化け物を倒す毎週日曜日の朝にやってるタイプのボランティアな。

今度は頭がおかしいと思うだろ、イエス。俺の頭はおかしい、てか、イカレてる。

だが、このことに関しては妄想か世迷言にしたいところだが、マジなのだ。

なら、真顔で言え？

無理だろ、馬鹿みたいじゃねえか。こんなことをマジ顔で言

える奴は脳みそが沸いているとしか思えない。

例えば、そう。

……この世界の日がもし、24時間じゃないと言ったらどう思う？　なんて科白も未だに真顔で言える気がしない。

ああ、アレだ。日没までの時間にはズレがあるから閏年が出来るとか、そういう話じゃなくてだな。

……そんなことは思わないか、思った数少ない貴女とはお友達になりたいね。まあ、俺だけなんだろうけど。

で、なにが言いたいかって言う……面倒くさいや、やっぱ説明すんのやめた。

どうせ、これから何度もこの話にはなるんだ。同じ話を聞くのは好きか？

俺は嫌いだね、一度言ったことを何度も聞かれるのも嫌いだ。

今はとりあえず、俺達は化け物と日夜戦っている、ということだけ覚えてくれていればいい。

と言っても、もちろん俺は正義の味方なんかじゃない。そんなの似合わないしな。

俺は金と、自分勝手に確かでもない目的のため戦っている。他の先輩方は正義の味方なのかもしれないが、俺にはそんな誇れる理由は存在しない。

……それと、単純に断れなかったってだけ、だな。

うちの学校、月光館学園は桐条グループの傘下にある。俺はその理事長とグループの跡取りである桐条美鶴にスカウトされた。

断れるわけがない、少なくとも今はな。

月光館学園は初等部から高等部まである学園だが、俺が学園入ったのは高校からだ。

これも詳細は省くが俺は父親の反対を押し切った入学だった。父親は入学は認めたものの、一切の資金を出してくれることはなかった。貸すのは判子だけ。

ま、アレだよ。他人の家庭の事情なんか興味もないだろ？

……それでも桐条の学生支援制度を受けて、なんとか授業料などは卒業後払うと言うことでなんとかあった。が問題は生活のほうだね。

男子寮に入る手もあったんだが、それだとかかなりバイトが制約されるだろ。寮で生きていくぶんの食費やらはどうしたらいい。それに、金は色々と入用だ。これからのことを考えるにも少しでもいいからほしい。

卒業後、俺は父親の援助を受ける気はまるきりないんだしな。

そんな理由で常に万年金欠の俺は深夜近くまで、アルバイトを行う生活を続けていた。

でもいつからだるか、俺は零時近くになると記憶を失う妙な持病を持っていた。

気がつくと翌朝自宅の布団の中にいたり、得体の知れないアクセサリーや金を手に持っていたり、着替えていたり服がなくなっていたりする。

なぜか身に覚えのない傷があったことも、一度や二度じゃない。

はっきり言って気味が悪かったが、気にしないように生きていくしかなかった。

へたに深く考えると逆に危険そうだったし、今上手く言っている

ものをなんとかする必要性もない。

…… ようするに見て見ぬフリをした訳だ。

これは零時になる前に家に帰っていた場合も同じ。早めに就寝出来たとしてもなんらかの変化が回りにあったりする。

どうしたもんかね、いや、今ではそれも『影時間』に覚醒したが故に起きたものと判断しているのだが、こうして完全に目覚めた後でも時折発生するのが問題だ。

いまだに、自分の記憶が飛ぶのはすつきりしない。

…… 影時間がなにかって？

ああ、結局説明する羽目になっちまったな。

影時間ってのは…… あれだ。

一日と一日の間に存在する狭間の世界。

言っちゃえばそう、悪夢だ。化け物が謳歌する、悪夢の世界。

それが影時間だ。

＊

新都市での公共交通はバスとモノレールに大半を頼っている。

そのうちの一つ、モノレール『あねはづる』車内。

もう夜も遅く、辺りに人気ひとけがない中でアナウンスが流れる。

「今日は、ポイント故障のため。ダイヤが大幅に乱れ……」

誰も聞くことのない、お詫びのアナウンス。

声は声として確かに存在しているのに、あるうがなかるうがどう

でもいいその謝罪は、もう存在していないのと同じだ。

あるけど、ないのと同じもの。

ゆれる車内。

まばらに座る人々、でも、しゃべる人は誰一人としていない。
だから、よくそのアナウンスは響いた。

ひとりだ、こんなにも近くに人がいると言うのに。

『わたし』はひとりだ。

「お急ぎのお客様には、大変ご迷惑をおかけ致しました」

わたしは耳を閉ざす。

眠るように目を閉じる。

外の世界の一切を拒絶するように、耳を塞ぐ。

ヘッドホンから流れてくるのは、絶対に抗いようのないものへ戦
いを挑む、そんな歌。

勝ち目のないものに、負けないと強く立ち誇る歌。

憧れる。

そんなのわたしは絶対に勝てないもの。

だって、怖い。

怖い。

絶対に消すことの出来ない、焼き尽くすことの出来ないモノ。

『あの人』のように、強くはなれない。

でも。それでも、わたしがこの歌を聴くのは。

「次は、巖戸台……」

わたしは、ひたすらに外を眺め続ける。

そこにわたしの心を動かすものは存在しない。

わたしの心を動かすものは、いつだってわたしの胸の内側にある。
わたしの心を脅かすものは、いつだってわたしの外の世界ある。

でも、わたしの生きる世界は。

……いつだって、外の世界だ。

ようやく、目的の巖戸台に到着したモノレールを降りる。

駅の時計を確認すると、思ったとおり到着時間はかなり予定よりも遅れていた。

時間はもうすぐ零時、わたしはかるく息を吐く。

別に思い通りにいかないのは今始まったことじゃない。

わたしの人生を物語にしたら、それはいつだってトラブル続きの話だ。って言うか、むしろ始まりからトラブルで、たぶん最後もトラブルで終わるんだろう。

平坦な毎日退屈だろうけど、アクシデントが多すぎて逆にまたか、って悲しみや笑いを乗り越えて、呆れてくる。しまいには、何も考えたなくなる。

まあ、そんなわたしのせいじゃないし。

そもそも好きでそんな人生送ってるんじゃない。

「この電車、辰巳ポートアイランド行き、本日の最終電車となっております」

そんな構内アナウンスを背景に、だけど別にそれに耳を傾ける人はなく、ただそれぞれの目的地へと歩いていく。

もちろん、わたしもその中の一人だ。

ヘタに誰かというより、赤の他人にまぎれて歩いているほうが落ち着くのはなんなんだろう？

再び、両耳のヘッド音から流れる音に意識を置く。
決して、なることの出来ない自分へとなるために。

そんな、いつものように……そんな状態でわたしは駅を出ようとした。

出ようとした、のだ。

それは前触れのなく訪れた、ようだった。

それがなにをきっかけにして起きたものなのかわたしには理解できなかった。

だけど、もし理解できたからってそれがなんなの、って話だった。

まず、目の前が暗くなって、プレイヤーから流れる音楽が止まった。

目が暗闇に順応するまで、僅かな時間の混乱する。

それが収まって、思うのは「停電なのかな」と言うこと。

そう、周囲の一切の電気で動くもの全てがその活動を停止していたのだった。

でも、とわたしはすぐにその考えを否定する。

照明が消える、それはいいとしても。

……なぜ、プレイヤーからの音楽が止まったのか。
その疑問には答えようがない。

異変はそれだけでない、どこか周囲の気配がおかしい。

余計な物音、自分以外の動くものがまったく存在しないのだ。

わたしは周囲を見渡しながら、歩き出す。

とりあえずは目的地へと急ぐために。それが出来るなら、特に問題はないのだった。

わたしが駅から出て、それでもなお自分以外に人を見かけることはなかった。

異様なほど静かな街。

その人気のない街に、棺のようなオブジェが乱立している。大きさは……そう、ちょうど人が納まる程度。

もし人が納まっているのなら、なんて想像は妄想に過ぎるというものだろう。

わたしは自分の子供っぽさにすこし笑った、想像力が豊かなのはイイコトだけど、もうすこし大人になってもいい年頃だと思う。

わたしは歩く、笑みを浮かべてひたすらに。

なぜか地面に染み出している、どこか血の様な色の水溜りを踏みつけて。

見上げれば、深夜零時の空は緑色に染まり、光る月は異様なほどに巨大で明るかった。

そう、どのアナクロ時計も指し示す時間はすべて……。

あの異様な天を突く様に。

*

わたしは見上げる。

どうやら、これが自分の目指していた目的地であるようだった。

『月光館学園蔵戸台分寮』、入学案内通りの住所で間違いない。そう、わたしは転入のために、その住居を寮に移したのだった。当たり前なただそれだけのこと。

たったそれだけのことに転入前日からこうしたろくでもないことが起きるのが、わたしの人生というモノだった。

ま、仕方ない。

そついう風に生まれついているんだから。

外観は、どこか古くしかし特徴的なそのデザインの建物。

だけど、十分にある種のセンスを感じられるオシャレなもの。

個性コニクと好ましい外観、っていうのは、混同された拳句見失われがちだ。個性的がほめ言葉なんて誰も思わない。

デザインという視点以外で建造物を考えるなら、あとは機能的かどうか。

機能的って言うのは、突き詰めていけば十分にデザインとして美しくあるものだ。わたしは思っけど。

その照明がついていないのは深夜だからだろうか、それともこの異変のせいなのか。

未だ、わたしのヘッドホンからは音楽は鳴らない。

考えても無駄か。

わたしは扉を開け、中へと踏み込む。

やはり、外から見たとおり中に明かりはない。

「ようこそ」

突然の歓迎の言葉。

それは幼い子供の声だった。

その声の主を探す。

いたのは寮の入り口のカウンター、声の主は、白と黒の横縞で上下をそろえた囚人服のような服装の、小さな男の子だった。

「遅かったね。長い間、君を待ってたよ」

この寮の人だろうか。

いや、ここに以上はそうなんだろう。でも、どうして子供が？

子供は一枚のカードを手にしてる、そして、それを見せるようにして言った。

「この先に進むなら、ここに署名をして。……一応、『契約』だからね」

「手続きは済ましているはずだけど？」

寮にはもう入るだけのはず。

……どこか、この子供に得体の知れないものを感じた。

子供は嫌いじゃない、すごく優しくしたくなる。

幼い間ぐらいは幸せであるべきだと思うから。

でも、そんな感情とは別に……。

「ああ、怖がらないで。たいしたものじゃないんだ、ここからは自分の決めたことに責任を取ってもらってただけだから」

「別に怖がってなんかない」

「そう？」

微笑む子供、その手にあるカードにはメッセージが書かれている。それはこんなものだった。

『我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん』

その下にあるのは署名の欄。

なにかの冗談だろうか、これは。

そう思ってもわたしは。

間違いなく、手を伸ばし署名した。

一之瀬^{いちのせ} 沙耶^{さや}と。

それは間違いなく、わたしの意思だった。

わたしは言われなくても、そう生きているんだから。

「確かに」

子供は署名されたカードを見て、満足そうに呟く。

「時は、誰にでも結末を運んでくるよ。たとえば、耳と目を塞いだとしてもね」

わたしはどこか自分を見透かされたような気分になった。
それを振り払うように一層強く、声を張る。

「これでいいの？　これだけ？」

「ああ、これでいいよ」

「……当たり前のことじゃない、こんなの」

「そう、当たり前のことだね。自分で選んで、受け入れる。……それだけのことだ」

子供は薄っすらと笑みを浮かべる。

「……さあ、始まるよ」

そう言つと、その子供は闇に溶けるかのように消えてしまった。

わたしは一瞬唖然とするも、この異常な雰囲気の中ではそれほど違和感を感じなかった。

どこか夢の中にいるような感覚、今自分が目覚めているのか。確信が持てない。

わたしは今、ちゃんと現実にいるの？

わたしがいるのは……本当にいつもの外の世界？

「……誰！？」

その時寮の奥から女の子の声がした。

*

変容した世界で眩き続ける少女。
その眩きは誰にも届くことはない。

「……結局、この時間になるまで出来なかった」

彼女は自室で床に座り込み、今日こそあることを実行しようし…。

出来なかった。

その手に怪しく輝く金属性の物体。
それはそう、銃器のような形をしていた。

「コレを額にあてて……」

毎日、毎日。

ある事実を知った時から、ある世界を知ったときから。
彼女はこれを繰り返している。

呼吸を荒くし、手が震える。

「引き金を引くだけ……なのに」

考えるだけで、駄目なのだ。
実行しようとしなくても。

頭を抱えながらも、左右になにかを振り払うような動作をしてか
ら。

真っ直ぐに前を向く。

「やらなきゃ……」

その声にあるのはやらねばならないと言う、決意と義務。だが、それを揺るがすほどにあるのは恐怖と拒絶。どうしようもない、恐怖という名の敵。それと対峙し、それでも彼女は呟き続ける。

「やらなきゃ……」

彼女は両手をで銃器のようなものを握り締め、銃口を額に向けた。手は震え、汗がにじむ。

金属性の物体が額にぶつかり、震えのせいでカタカタカタ、と鳴る。

それでも叱咤するように最後にもう一度呟き。

そして……。

「　　っ!？」

彼女は銃器のようなそれを手放した。そのまま脱力し、うつむく。

乾いた涙の跡を伝う、涙。

「あはは……やっぱり、無理なんだ。わたし」

彼女は自分のあふれ出す感情をどうすることも出来ずにいた。自分はどんなことでもしてみせる、そう決めたはずだった。出来ることならなんだって……その誓いはこの程度のものだったのだろうか？

「こんなんでも……える訳ないよ」

その声を聴くモノはやはり誰もいない。

*

落ち着いた彼女は部屋を出て、階段を下りてロビーへと向かった。たいした意味など無い、眠れなかったのだ。

気持ちが高ぶっていると言う理由を差し引いても、この『時間』に無防備でいるなど、まともな神経で出来るとは彼女には思えなかった。

どうせ眠れないのなら、なにか飲みながら一息吐いた方がいい。

しかし……。

ロビーの奥には異変があった。

本来なら、今の時間帯は『普通の人間は活動することができない』はずなのだ。

それなのに明らかに何者かの気配がする。早くなる鼓動、恐怖と緊張感。

「この時間に……どうして……」

歩みを進めて見えたのは、自分と同じ年ごろに見える女の子だった。

髪を束ねた顔立ちのきれいな女の子……。

それが明りのない寮のロビーに佇んでいた。この時間帯ゆえの、不穏な空気と暗緑の色彩の中で……その女の子どこか赤みがかった瞳。こんな状況の中で平然という佇まいが、どこかまともな人ではないような。

「まさか……」

彼女はその異質な侵入を睨み付ける。
敵意と恐怖を持って。

今の時間にいられるのは普通の人間じゃない、いるとしたら、特別であるか……。

人間でないか、だ。

二人もの戦力が今、トレーニングによって寮にはいない。
もう一人はいるかどうか、わからない。
今は自分ひとり。

それが彼女から冷静な判断力を奪い、必然的にある選択を迫った。

「え……な、に？」

目の前の女の子からつぶやかれた言葉。
その意味を深く考えることなく……彼女は自ら（・・）の額に銃口を向けた。

目の前の女の子の様子から困惑を読み取ることもなく、覚悟を決めるとともに、必死の形相で目を堅くつむる。

故に、もうその女の子がどんな表情を見せようがもう彼女には届かない。

そして、とうとうその震える両手で引き金を……。
引き絞ろつと……。

「待て！」

背後から呼びかけられた女性の声。

とつさに振り替えるとともに彼女は銃を下した。

そこにいたのは明確に彼女にとって味方であり、それを確認してすぐに周囲が明るくなったからだ。

安心から彼女は呟く。

「あかりが……」

それは悪夢が終わったことを意味した。

一之瀬沙耶の物語が、今日という一日が、さらに最悪にならなかったことを意味していた。

*

現れた人物は彼女にとって先輩にあたる人物であった。

「……到着が遅れたようだね」

一同がやや落ち着いたのを確認し、場をまとめるためにそう侵入者に声をかけると、そのまま自らを指し自己紹介を始める。

「私は、桐条 美鶴。3年だ。この寮に住んでいる者だ」

桐条グループの現当主の一人娘であり、跡取り。

学園でも特別な存在である桐条先輩は、彼女にとって複雑な感情の対象でもあった。

そんな美鶴に彼女は訝しげに問いかける。

「……誰ですか？」

「彼女は『転入生』だ。ここへの入寮が急に決まってね……」

目の前の侵入者を指し、そう説明する美鶴。

その言葉に頷き、平然と自己紹介を始める不審な侵入者、もとい『転入生』。

「はい、一之瀬 沙耶です。モノレールが遅れちゃいまして……」

にこやかに敵意を削ぐような笑みを浮かべる沙耶。

それは男女問わず、惹きつけられるような力が備わっていた。思わず、目が外せなくなった自分を自覚し、彼女は困惑する。

「ああ、聞いているよ。……君はいずれ、一般寮への割り当てが正式にされるだろう」

「は、一般寮ですか？」

「そう、ここにいるのは一時的な処置だと思ってくれ」

「はいっ、わかりました」

特に疑問をはさむこともなく、会話そのものを楽しむかのような上機嫌で答える沙耶。

彼女はどうしたらいいかわからず、とりあえず自らの先輩に問いかける。

「……いいんですか」

「……さあな」

返ってきたのは、答にもならないような答え。

聞こえていたのか、沙耶が首を傾げたそぶりを見せた。美鶴はようやく気付いたかのように口を開く。

「ああ、そうだったな……彼女は岳羽ゆかり。この春から二年生だから、君と同じだな」

突然、紹介を促され戸惑いそうになるも、軽く会釈する。

「……岳羽です」

沙耶はそれに対して一層、笑みを深めた。

「同級生なんだ！ よろしくだねっ」

「えっ……あ、うん……」

今まであった奇妙なことには一切触れず、なかったかのように振る舞う沙耶。

そこに違和感を感じながらも、気が付けば彼女……岳羽ゆかりは笑みを返していた

「こちらこそ、よろしく……」

にへらー、と顔を崩してみせる沙耶。

つられて同じような表情を浮かべそうになるゆかり。

（って、なにやってるんだ。わたしっ!？）

美鶴は二人の挨拶が終えたのを見計らい、声を掛ける。

「今日はもう遅い。部屋は3階の一番奥に用意してある。荷物も届いているはずだ、すぐに休むといい」

「あ、じゃ、案内するんで、ついて来て下さい」

ゆかりは自ら案内を買って出る。

先輩である美鶴にやらせるわけもないという事情もあるが、自然とそうしたくなってしまったのだ。

沙耶はそれに頷いて、ゆかりと共に歩き出す。

「うんっ、お願いね。岳羽さん」

その歩き去る二人の背中を、美鶴は見つめ続けていた。

*

沙耶を案内しながら3階へと上がっていく。

「2階は男子寮だからさ、あんまり行かないようにね」

「男の人もいるの？」

「うん、男女共同の寮なんだ」

「ふうん、なんか建物のそうだけど変わってるねー」

雑談を交えながら、3階へと上がり、部屋への扉が並ぶ廊下を歩いていく。

立ち止まったのは一番奥の扉。

「この部屋だね。一番奥だから、覚えやすいでしょ？」

ゆかりはそう、沙耶に問いかける。

「そうだね、一番奥に行くのめんどくさいかもだけど」

「あ、それはあるかもね」

「……トイレも一番遠いし」

「まあね、夜中とか特にね。って今、夜だけど」

初対面のはずなのに、自然に親しげに話せている。

ゆかりは特にそこに疑問を持つことはない、不自然さがなければいいのだ。

自分がさっきまでいた状況が、異質で不自然だったという認識はすでに外れかけている。沙耶に抱いていたはずの恐怖感すらも。

「えっと、あとなんかあるかな？ 何か訊きたいことある？」

ゆかりは案内の最後に沙耶に確認した。

一応の、お約束のような確認。たいていは特にない、で通されるような。

しかし、考えるそぶりもなしに言葉は返ってきた。それも、ゆかりにとって意味不明なもの。

「署名したんだけどさ、必要あった？」

「え？ 署名？」

署名……特に心当たりはない。

なにを言っているのかが、つかめない。

「あ、別にいいよ。うちの勘違いだと思うから」

「そう？」

疑問には思うが、本人がそういうのだからいいんだろう。そう気を取り直して、もう一つ確認しておくことにした。ゆかりにとってはむしろこちらが本題なのだから。

「あの……ちょっと訊きたいんだけど」

「なに？」

「……駅からここに来る間、ずっと平気だったの？」

沙耶は不思議そうな目でゆかりを見つめる。
数秒の沈黙。

そして、目を細め、口元をゆるめて返答した。たった一言。

「平気だったよ」

「そっか……」

（なんかお互いにどうしたらいいか、わかんない感じなのかな）

ゆかりは、表情を和らげる。

自分が困惑しているように、沙耶もそうなのだ。だからこそ、そのことに触れずにいる。ゆかりはそう解釈することにした。

「……ならいいんだ。ごめん、気にしないで。あー、じゃあ、私は行くね……」

「うん、案内してくれてありがとうね」

ゆかりは頷いて歩き去ろうとし、すぐに立ち止まる。

一言、フォローするために。

「あー、あのさ」

「ん？」

部屋に入ろうとしていた沙耶は、動きを止めた。

「色々、わからないことあると思うけど、それはまた、今度ね…
…おやすみなさい」

そう一方的に告げて、ゆかりは階段を降りていった。

「おやすみー」

と、背後から返ってくる明るい声。

ゆかりはその声に口元をゆるませながらも、美鶴への報告と、これからのことについてどう相談するか、そのことに頭を巡らせつつあった

4月6日 月曜日 く 『物語のはじまり』 (後書き)

2作品にどう変化がつけられるかはわかりませんが、頑張ってみますので気長にお待ち頂ければ、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1867t/>

Persona3 Ifes 『I'm just me!』 ~ Redbloom in Darkness編

2011年10月8日02時06分発行